Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが話面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今号からは大型コーナースピーカーを連続してご紹介。まずはJBLの初期型ハーツフィールドをご紹介しよう。

本文／田中伊佐資
製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林紀彦（彩紅舎）

第29回 **JBL**

J.B.ランシングは1930年代頃から映画館や劇場用のスピーカーシステム用のユニットを多数開発しており、それらを使った大型のシステムも多くの映画館や劇場で採用され、高い評価を得ていた。1950年代に入るとアメリカでは当時の音響メーカーが競って家庭用の高級大型スピーカーの開発を開始。JBLも自社開発で既に定評のあったユニット類を他社と異なる斬新なデザインのキャビネットに搭載したモデルが数種類この頃から発表され、現在になってもその魅力はマニアの憧れのシステムとなっている。

D30085 Hartsfield

1956年に開発された大型コーナーホーンスピーカーで、発売当時は雑誌『ライフ』が「究極の夢のスピーカー」と謳えたほど話題になった。キャビネットは複雑なフロントロード型の折り曲げホーンが採用され、この基本構造は当時のJBLのエンジニアであったハーツフィールド氏によって開発された。ユニットは当時の劇場用に使われた375ドライバーと150-4Cウーファー、N-500 ネットワークが搭載されている。また、このシステムのために開発されたL5090音響レンズがフロント上部にシンボリックに配置され、仕上げもマホガニーとブロンドが用意されていた

背面側。天板は背面上部分のネジを外すと上に外れる構造になっていて、さらにホーン／ドライバーを外すとウーファーボックスのフタがあり、それを開けると150-4Cウーファーが斜めに装着されている

Hartsfield 正面側。他社のシステムとは明らかにキャビネットのデザインコンセプトが違っていた。このシステムのために開発されたフロント正面上のゴールドに輝くホーンレンズは、スラントプレートを11枚組み合わせた構造になっており、その後の JBL の43・・シリーズのモニターシステムには欠かせないデザインの音響パーツとなっていった

雰囲気を一変させる威厳と屈託ないストレートな鳴り

「ここ何回か大型スピーカーを続けようかと思っています。前回がタンノイのチューダー・オートグラフ。今日はJBLのハーツフィールド」

アトリエJe-teeの岡田さんはそう告知した。もちろん次も決まっているようではあったが「お楽しみ」がその答えだった。

ヴィンテージの大型スピーカーは、歳月を経た高級家具と等しい。だからそれ相応の部屋、大きくいうと家くらい用意する覚悟がないとみっともないことになってしまう。つまりはオーナーの趣味が問われる。「オーディオはまず部屋から」という言葉があるが、また違った意味で「部屋から」なのだ。

店にあったハーツフィールドも周囲の雰囲気を一変させてしまうような威厳があった。オレを滅多なところに置くなよという顔をしている。それだけ上物だ。

「モノラル時代のスピーカーなので、これだけきれいなものをペアにするのはなかなか難しいですね。ユニットも当時のままでした。アメリカのコレクターが大事に持っていたんです」

良好な聴取位置に座り、左右2台を交互に眺めているとおもむろに「アート・ペッパー・ミーツ・ザ・リズム・セクション」が始まった。

同郷。岡田さんがこれを試聴の頭に持ってきた意味はそれだろう。カリフォルニアで生まれた銘品と西海岸を代表するレーベル、コンテンポラリーの名盤。両者はドンピシャなマッチングを示した。

カラッとしたアルトが伸びやかによく歌う。でも軽々しくない。ビートはジャズ特有の粘りや重みも兼ね備えている。本当に2ウェイですかと投げかけたくなるほどレンジは広い。特に高域の伸びが大型ドライバー一発とは思えない。

「初期型の375は振動板が薄くて軽いんですね。そのため繊細な表現もできます。アンプはやはり管球です」

375の背中はバブルパックと呼ばれる山高帽を被せたような形状になっている。後期の黒い375とは、モデル名が同じでもだいぶタイプが違うらしい。

次の「アズ・タイム・ゴーズ・バイ」を歌うジュリー・ロンドンは、彼女の専売特許というか、いつものようにしっとりしたムンムン調で迫ってくる。でも、こっちに重くもたれかかってくるような暑苦しさがない。この歌手には計算尽くにも思える色仕掛けの節回しに閉口することがあるのだが、ハーツフィールドの屈託がないストレートな鳴りがそれを消めさせている。

そういえばハーツフィールドは部屋の隅に置く設計になっている。試聴では一般的なスピーカー・セッティングだった。しかしそれでも十分によかった。設計の意図通りに置いたら、どんな音になるのだろう。やはりこのスピーカーはそれなりの甲斐性が必要なようだ。

150-4C ウーファー。1953年にウエストレックスのシステム用に開発されたT-510Aが原型。JBL の130シリーズのフレームとマグネットは同様だが、サブリングが装着され、外注と思われる頂角の深いウーファーコーンが採用されている。このウーファーコーンのタイプは当時の Tru-Sonic や JENSEN の大型スピーカーに採用されたウーファーによく見られる

N500ネットワーク。シアター用に開発されていたものをコンパクトなケースに収納して3ステップの高域調整が採用されている

375 ドライバー。1953年にウエスタンの4インチのダイアフラムを持つ594Aフィールドコイルタイプ。これをパーマネントマグネットタイプとしてして開発したT-530Aがその原型となる。初期型の375はグレー塗装のバックカバーが少し盛り上がったタイプで、JBL のシステムで最初に搭載されたのはハーツフィールドである。このドライバーは JBL の主力のユニットで数種類あり、1980年代頃までの大型のシステムに搭載されていた

Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。前号ではJBLの初期型ハーツフィールドを紹介したが、今回はこれとほぼ同時代の製品であるJBLのC-39／HarlanとC-49／Daleを紹介しよう。

第34回　ビル・トーマス期のJBL

1949年にジム・ランシングが突然に亡くなり、その跡を継いだのがビル・トーマスである。彼は会社経営に手腕を発揮して後のJBLのブランドイメージの基礎を築いていく人物。プロダクト開発にバート・ロカシー、デザイナーにアーノルド・ウオルフ、アルヴィン・ラステイグが起用され、おなじみの C-34ハークネス、C-38バロン等の Cシリーズがシステムラインアップされ、同シリーズは1967年に開発された C-68 SOVEREEIGN 3 まで続く。この同時期には有名なHartsfieldやParagonなども製品ラインアップに並び、JBLの歴史の中で最も華やかな時代だったことがわかる。

本文／**田中伊佐資**
製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）
撮影／小林幹彦（彩虹舎）
取材協力／ SOUND CREATE

C-39/Harlan

1956年にコーナー型モノラルシステムとして開発され数種類のユニット構成が搭載可能で、075 ／ D130×2 /N2600 または 175DLH ／ 130B×2／ N1200 の組み合わせが最も人気があるシステムだった。 最大で 3ウェイの38cmダブルウーファーまで搭載が可能なシステムとなっている。 箱の材質は全て19mmの米松で構成されており、 箱の構造はバスレフ型で底板に横長のポートが開けられている、 以前紹介したD-1004と同様のダブルウーファー仕様のコーナー型のバスレフキャビネットなので箱内部の定在波が少なく音抜けが良く迫力のある鳴り方をする。

音楽にたっぷり浸れる まさにJBLの〝王子〟

アトリエJe-teeからJBL C49デールが入荷した連絡をもらった。これは珍しいモデルですよということなので、さっそく聴きに行くことにした。

JBLのCシリーズはどれもこれも美しく、サイズの大小を問わずどことなく一家言ある音がする。このデールもまったくそうだった。フルレンジ一発ではあるけど、強い説得力を伴って「音」ではなく「音楽」を心に響かせる。

店ではウェス・モンゴメリーの『アーディ・イン・ザ・ライフ』がかかった。ほんわかしたイージーリスニング・ジャズのイメージを覆し、演奏者の覇気が迫ってくる。なんだろう、この魔力は。優秀なスペックの現代的なスピーカーでは、それこそイージーなリスニングになってしまいがちなのだが。

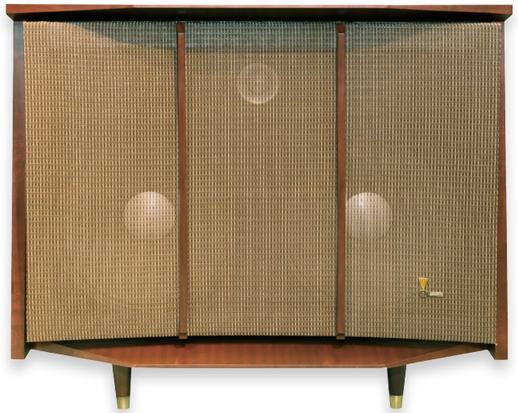
続いてスティーリー・ダンの『ガウチョ』。これはヴィンテージ泣かせのメリハリが利いた録音だが、リズムがしっかりかっちりと切れている。そしてネットワークで管理されていない強みを存分に発揮し、ユニットはのびやかでストレスなく鳴りきっている。マルチ・ユニットのスピーカーと比べれば無論レンジは狭い。だがそれを感じさせない。耳への「当たり」が気持ちいい。

この試聴後すぐ、同じくJBLのCシリーズのなかでも特に稀少なC39ハーランが入り、銀座2丁目のサウンドクリエイト・ラウンジで販売されている知らせが届いた。店は5丁目から移転してほぼ1年になり、僕はまだ訪れたことがないこともあり、向かう足取りは軽い。

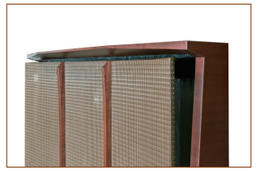
広いフロアの最も奥にC30ハーツフィールドが佇んでいた。ハーツが王様なら、その前の立つハーランは王子。そんな雰囲気を醸し出している。D130のダブル・ウーファーのわりにはコンパクトで、見れば見るほど細部のデザインが凝っている。フロントグリルは中心部がへこむように反っているのも、かなりの手間仕事だ。こんなにいい個体は市場にはあまり出てこないと岡田さんは言う。

小手試しにマイルス・デイヴィスの『フォア&モア』でスタート。機材はリンのネットワークプレーヤーMajikDSMとオクターヴのプリメインアンプV110SE。シンバルの激しいあたりを聴くソースだけど、そんなことはどこかに吹っ飛ぶほど、ハイブローな風格というかアンビエンスを感じた。そういうオーディオ的な聴き方は止めろと王子から諭された気がした。

すぐにシナトラの「フライ・ミー・トゥ・ザ・ムーン」。しんみりと甘いバリトン・ヴォイスに聴き入る。音楽にたっぷりと浸りきれる音。いや、音とか言っちゃいけない。音を分析する気持ちは、音楽の鑑賞を邪魔することがある。最近そんなふうな心境の僕は、ハーランを聴いてヴィンテージオーディオの在り方にいっそう気持ちが傾斜したのだった。



同時にデザインされた脚付きタイプのC-38 バロン、C-40 ハークネス 等はとても美しく、シンプルでスクエアなデザインだが、 C-39 Harlan は複雑でテーパードな面取りでコーナーキャビネットがデザインされており、前と横と上のどの角度から見ても楽しませてくれる。 正面のサランネットを外すとバッフルが顔を出し、3ウェイ用にLE-175DLH、075用のユニット穴が開けられているのがわかる。 今回の紹介するシステムはD130×2と075の2ウェイシステムなので、本来175DLHが取り付けられる穴には075用がアダプターで取り付けられている。



C-49/Dale

1959年に生産が開始され、発売当時はユニットの組み合わせが LE8が1本搭載されたモデルと LE-10 ／ LE-30 ／ LX3 の2ウェイタイプが用意されていた。 箱はこの時期から開発されたラバータイプのユニットが搭載されるため、19mm厚の板でかなりしっかりと造られており、丸いパイプ型のポートのバスレフキャビネットとなっていて、小柄なキャビネット以上にスケールの大きなサウンドを引き出す。 正面から見ると、この時期のJBLらしい一連の美しいスクエアなデザインだが、 少し横から見ると斜めに切り返されたカットラインがとても斬新で時代を感じさせない完成度がある。

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com